

## 千代の古道

土田龍太郎

中納言在原行平と聞ゆるは、かの色好みの名に立てる伊勢物語の昔男、中將在原業平の異はらからなれども、この人につきてくさぐさの典かみに記せるかれこれのことも、いづれもよしありげにためたければゆめなほざりには見すぐべからず。この行平、官位つかさぐらゐの上りゆくさまをけみするに、弟業平とはことかはりて、ことにあやふかりしことありたりとも見えぬは、その生れつきたる性にあだめきおごりたるあとしるからで、おとなしくまめやかなる方の勝りたるけにてもやありけむ。さはれすきずきしといふまでこそなけれ、心ばえやさしく情深なまけかりしかば、敷島の道にもくからでその詠める大和歌十首ほどなほ傳はりたり。かつておのが家にて催せし歌合十二番、在民部卿家歌合といへれど、今の世まで遺れる歌合げにあまたなるなかにても、これにまさりて古きものさらになきぞいみじき。この中納言兼民部卿の世に在りしあとをさながら尋ねむとせば、いと言長かるべければ、ただ小松の帝の芹川行幸のをりのことばかりぞここに述べまくおぼゆるなる。光孝天皇仁和二年十二月十四日、芹川に行幸ありしかど、この日主上親王群臣を率もて日ねもす鷹狩したまひしときのわきてよそほしくきよらをつくしけむありさま、三代實録の記載によりて古きを今に偲ぶにも、いとどはてなき心地つのりてゆかしなつかしと言ふもおろかなり。この日御狩に仕へまつりしあるをのこのこの摺狩衣すりかりぎぬの袂に書きつけける。

翁さび人などがめそ狩衣

けふばかりとぞ鶴たうもなくなる

といへる一首、主上見とがめたまひて、わが身の老いたまへるを笑へるやにおぼしひがめたるにてもやありけむ、御氣色悪しかりけること伊勢物語に説きたり。芹川に行幸ありし仁和二年に先立ちて元慶四年にはや身まかりし業平朝臣の右の歌詠めりしことわりさらにあるべからず。この一首、後撰集には在原行平朝臣の歌とて載りたり。行平おほやけの御いきどほりにたへて身のおきどころなきまで恐れかしこみけりとおぼしくて、行幸のまたの日はや致仕の表奉りけると詞書に記せり。同じ行幸のをりに行平の詠みまゐらせしほかの一首、後撰集には右の歌にならべ載せたり。

嵯峨の山行幸絶えにし芹川の

千代の古道跡はありけり

といへるこの歌、久しく行幸絶えたりし芹川に今日また主上の御出でましありて、かの嵯峨の帝の弘仁の古き例ためしにならひたまひけることをとほぎまゐらせしにまぎれなければ、げにをりに適かなへりと言はでやあるべき。行平の歌のめでたきにまかせて、これをまねびて後の世の人の歌

詠む例少からねば、芹川てふところの名いつしか歌枕になりたれど、いづれの川をかく呼びけるやらむ、しかとは定めがたきぞいといぶかしき。さはれおほよそ後の臨川寺りんせんじの東より下嵯峨へ流るる小川を指せるに似たり。あるはまたこの川、嵯峨小倉山よりおこりて東へ流れ、大堰川に注ぐと思へる人なきにあらざるめり。この芹川にそひて通ひけむ千代の古道、時移るままによろづのことの廢れゆきなべてのさまの變りはてぬるそのすゑに、そのをりのろほわたちの輒はかなき跡だになほ残りとしも思はれず、昔を今に返すよしとてなければ、ただ行平中納言の詠みまゐらせし一首ばかりをたよりにて、去いにし世のいみじく盛りなりしさまはるかに仰ぎ偲びまつらむほかせむすべなきぞあいなき。

(令和三年三月二十五日受附)